

ナシ黒星病秋型病斑の発生状況と秋季防除

黒星病はナシの重要病害であり、近年発生が多い傾向にあります。翌年の発生を抑えるためには、越冬する病原菌を対象とした秋季防除が効果的です。

1. 平成 28 年の発生状況

10 月中旬に行った秋型病斑（写真）調査の結果、全県における本年の発病度は平年より低く、発生地点率は平年よりやや低かった（表）。



写真 ナシ黒星病の秋型病斑（葉裏の薄い黒色の病斑）

表 ナシ黒星病秋型病斑の発病度および発生地点率

地域	発病度 ¹⁾		発生地点率 (%)	
	本年	平年 ²⁾	本年	平年
全県	0.24	1.10	55	68
県北・県央	0.25	1.68	50	62
県南	0.11	0.91	17	69
県西	0.32	0.87	80	69

- 1) 発病度 = $\Sigma (2A + B) / (2 \times \text{調査葉数}) \times 100$
 A : 病斑が葉面積の 1/2 以上を占める葉数 B : 病斑が葉面積の 1/2 未満の葉数 調査葉数 : 300 枚
 2) 平年 : 平成 18~27 年の平均値

2. 防除対策

① 落葉前の薬剤防除

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10~11 月の降雨時に枝を流れ落ちて鱗片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、落葉前の 11 月上旬までに薬剤防除を行う。特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

② 落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上には子のう胞子が形成され、翌年の 3~5 月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて土中深く埋める等（この作業ができない場合、ロータリ耕ですき込むだけでも効果が期待できる）、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。